

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 312



1997 NOVEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

1998年H A J 登山隊員募集

ニンチン・カンサ (7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:1998年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:80万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

海子山 (5,000m級)

四川省西部、理塘の南にある稻城県の名所、海子山にて5,000m峰の登山とトレッキングを楽しむ

みます。先月号で紹介したように、古寺と湖沼の多い知られざる地域です。隊長は酒井國光さんの予定です。

記

1. 期 間:1998年8月1日～21日(21日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:60万円
4. 〆 切 り:定員になり次第

未踏峰 (カバン 6,717m)

ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間は、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000m級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。山容は7,000m級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。

記

1. 期 間:1998年9月18日～11月1日(45日間)
2. 募集人員:6名程度
3. 負 担 金:95万円

表紙写真

ジーロン県を見下ろす「マ・ラ5,234m」に立つと、南々西の方向に一際高く聳え立つ巨峰が見えた。それがヤンラ・カンリ(ガネッシュ・ヒマールⅠ峰7,429m)であった。稜線の後ろから頭をのぞかせているのが、サラスンゴ(従来のガネッシュ・ヒマールⅡ峰、ラプサン・カルポ)、左はブヨン(従来のガネッシュ・ヒマールⅦ)である。ヤンラ・カンリ北面は本邦初公開である。
(記:山森 欣一)

ヒマラヤ No.312

- | | |
|---------------------------------------|------------|
| 1. ネパールとエヴェレスト初登頂 | エドモンド・ヒラリー |
| 5. ガネッシュ・ヒマールの混乱 | 山森 欣一 |
| 9. 追悼 原田達也 広島三郎 中込清次郎 | |
| 13. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・インフォメーション・Books〉 | |
| 16. スキル・ブルム峰氷河雪崩事故と教訓 | |
| 19. 15座目の八千メートル峰騒動顛末 | |
| 21. 中国高峰登山15年小史(16) 西藏その2 | |
| 22. トレッキング・ピーク『チュルー』について | 野沢井 歩 |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

ネパールとエヴェレスト初登頂

——— 上毛新聞社ホール講演 ———

エドモンド・ヒラリー

■アイス・フォールの中で

エヴェレスト遠征には、心に深く刻まれた思い出が沢山あります。苦しみ、恐怖、そして友情とチーム・スピリット。

テンジンと私が、アイス・フォールの試登に出かけた日の事はよく覚えています。自分達の実力を証明しようというのが目的でした。早朝にベース・キャンプを発ち、クレヴァス帯とアイス・フォール帯（ノーマルルート中最も危険と見なされている箇所）の中にルートを伸ばしていきました。我々はその危険地帯を首尾よく切り抜け、予想していた時間よりも早くアドバンス・ベース・キャンプ（6,384m）に到着しました。たっぷり休憩して十分な飲物と食べ物を摂った後、再びベース・キャンプに向けて出発しました。今度は時間に追われる側です。暗くなる前に、キャンプまで戻らなければならないのですから。アイス・フォール帯の中盤にさしかかった時、クレヴァスにたどり着きました。大きくはないが、底無しの様なクレヴァスです。大きくないと言っても、ヒョイと跨げる幅でもない。そのクレヴァスの下側の縁には、大きな氷塊がくっ付いていました。行きに私達は、この氷塊を踏み台にして注意深く越えていきました。

私は、ロープで確保してもらいながら、クレヴァスの縁まで降りました。そして、不安を振り払うようにして跳び上がり、例の氷塊の上に足をフラットに乗せるように着地しました。その瞬間、それは縁から剥がれ、私を上立たせたまま落ち始めたのです。『死ぬ直前、それまでの人生が頭の中を走馬燈の様に流れていく』こういう話は、皆さんお聞きになった事がありますね。その時の私が、そういう体験をしたかどうかは覚えていないので

すが、別の不思議な事が起こりました。全ての事が非常にゆっくりな状態になったんです。クレヴァスの壁が目の前を下から上へ通り過ぎていくのですが、まるで自分が下りのエレベーターに乗っているように、ゆっくりゆっくりとしたスピードでした。十分な考え事ができるぐらいの、時間の流れでした。そのうちに今度は、氷塊が回転し始め、（このままだと、私は壁に打ちつけられて粉々になってしまう）と思いました。と同時に、本能的に膝を曲げて空中に飛びました。それからまた落ち続けましたが、氷塊との間には数フィートの空間ができ、少しだけましな状態になっていました。どれ位い時間経ったでしょう…私の頭の中は、あまり楽しくない考えが占領していました。（今すぐにロープが張られなければ、私はクレヴァスの底で最悪の最後を迎える事になるだろう）その時、上にいたテンジンはありったけの力をビレイに注ぎ込み、「ピーン」という音と共にロープが張られました。私は氷壁の間を振子の様に揺れ、氷塊は底まで落ちて砕け散りました。その後私はステップを壁に刻みながら慎重に登り、無事にクレヴァスの外へ戻ったのです。

私はよく、こう尋ねられます。「その時のあな



▲講演するヒラリー氏（ROLEX社提供）

たは、テンジンに対して、いくら感謝してもしきれない程の思いを抱いたでしょう。何しろ、命の恩人なのだから」と。そうですね…。そこまで深い感情を抱いたかどうかは分かりません。もし、テンジンが私の命を救わなかったら、彼に大して非常に失望したかもしれませんが。

私達はひとつのチームでした。私はテンジンに対して、いつ何時でも適確な判断に基づいて行動してくれると信じていたし、テンジンも私に対して同様の信頼を寄せてくれていました。その信頼関係こそが強力なチーム・ワークを生み出すのです。私達はまさに、そのチーム・ワークを備えていたおかげで、エヴェレストの頂上に立つ事ができたわけです。

■エヴェレストの頂上から

7年前の話になります。オークランドにある自宅の書斎に座っていた時、電話が鳴りました。受話器を取って、「もしもし」と呼びかけると、息子のピーターの声が聞こえてきました。「もしもし、お父さん?」「ピーター、今どこにいるんだい?」と私が尋ねると「エヴェレストの頂上だよ」と答えるではありませんか!彼は小さな携帯電話を使っているとの事でした。携帯電話から送信された電波は、ベース・キャンプのパラボラ・アンテナに一端受信されると、そこから幾つかの人工衛星を経由して、オークランドの自宅まで運ばれてきたのです。近所からかかってきた電話と変わらない位い、息子の声ははっきり聞こえました。私がエヴェレストに登頂してから40年近くの年月が流れていた事を、その時改めて実感しました。ピーターと私は長々と話し、そして、ピーターが「そろそろ手が凍えてきたし、下山しなければならぬ時間だよ」と言ってきたのを機に、私達はこの画期的な通信を終えました。

■テンジンは

私と共にエヴェレスト登頂に成功したテンジン・ノルゲイ・シェルパは、ヒマラヤ地方の男の中で最も優秀である事を示しました。背が高く、がっしりした体つきの彼は、いつもはじけんばかりの笑顔を浮かべ、どんな人混みの中でもすぐに見つ

▼三平峠下で(右は八木原氏) 吉田宏氏提供



ける事ができるような、存在感のある人でした。若い頃のテンジンは、ヤクの世話や薪運びなどに明け暮れる、ごく普通の山村生活を送っていました。けれども、彼の真意はそうした日常生活からはるかにかけ離れたところにあったのです。彼はすぐに頭角を現して、ポーターから高所ポーター、そしてサードへと、あっと言う間に昇りつめてしまいました。そして、その底知れぬ体力と秀れた技術、確固たる意志によって、ついには傑出したクライマーとしての地位を不動のものとし、数々の檜舞台で活躍し続けました。テンジンの事は、知り合う前からその評判を聞いて知っていました。初めて会ったのは、1953年、カトマンズの英国大使館でした。その時の彼は、控え目だけれども親しみ易い感じで、とくに角彼と接した人間は誰もがその魅力に心を動かされるような、そんな人物でした。そして一目見た瞬間、(ああ、この人は何らかの形でトップに立つ人になるだろう)と思わずにはいられませんでした。

テンジンは、エヴェレスト遠征の中で生き生きとしていました。それは私も同様だったので、私と彼のチームは必ず良い結果をもたらすと信じる事ができました。他の仲間やシェルパ達の援助を得て、1953年5月29日、私達二人はエヴェレスト登頂に成功しました。そして、世界中のヒーローになったのです。私は、自分自身の事をそこまで大層に思いはしませんが、でもテンジンは、彼の出発点が山村のごく普通の若者であった事を考えれば、名実共に世界の頂に立ったヒーローと言えるでしょう。

私は、世界中の若い人達にこう伝えたい。「あ

あなたはヒーローになる可能性を秘めている。自然とかかわり合い、自然を守っていく——それはあなた達の肩にかかっています。何故なら、これから世界を、そして自然界を引き継いでいくのはあなた達若い世代であり、素晴らしい未来を築いていく主役は、他ならぬあなた達だからです。あなた達がもしやらなければ、一体誰がやるのでしょうか？」

■小さな学校を支援

行政の中心地であるナムチェ・バザール村から、美しいタミ谷に足を運んでみましょう。急な山道を登っていくと、高い山々が側まで迫ったタミ村に着きます。数年前、私達はこの村に、こじんまりとした学校を建てました。5つの小さな教室と、教室より少し大き目の医療所が設けてあります。教育施設と医療施設の合体は、山村の人々に対して非常に役立つプロジェクトです。

オープニング・セレモニーは何度経験しても良いものです。タミ村でのセレモニーも、印象深いものでした。適当な岩の上に座って式を眺めていた私の所へ、村の長老がやって来て、バク（シェルパ族の伝統的な礼服）からジョニー・ウォーカーの瓶を取り出しました。中身は、ジョニー・ウォーカーではなく、アラクという蒸留酒です。長老は、埃まみれの大きなグラスも取り出して、アラクをみなみなと注ぐと、私に差し出して飲みなさいというような手振りをしました。私はその紳士の気分を概したくなかったので、グラスを受け取ると一気に飲み干し、喉から胃袋までカーッと熱くなりました。空になったグラスを返すと、長老はまた酒を注ぎ入れ、私にすすめました。もう一度、私は飲み干しました。彼はもう一度、グラスを酒で満たしましたが、今度は、地元の仕来りに従ってグラスには口を付けず、私はアラクに指を浸してから、数滴空中にはじき飛ばしました。名も無い神様が、そこら辺を通り過ぎる時に、そのお酒を楽しむかも知れないからです。長老は、酒瓶とグラスをバクに納めると、私の側を離れました。

次に最長老がやって来て、同じ儀式を繰り返しました。さらに5、6人の村人も。私はすっかりホロ酔い気分になってしまいました。お酒の飲待

▼大清水にて（8月22日）吉田宏氏提供



が終わると、今度は若い生徒達が私達の前へ進み出て、白いスカーフをかけてくれました。生徒一人一人がかけてくれるものですから、私達はしまいにスカーフに埋もれる様なおかしな格好になってしまいました。生徒とその親達は、施設を作った私達に本当に感謝してくれているようでした。

■タンボチェ寺院の再建

クンブー地方で一番の寺院は、タンボチェです。谷の奥にはエヴェレストの雄姿が望めます。1989年2月、その寺が火事にみまわれ、焼け落ちてしまいました。火事の2日後、私は妻のジュンと一緒にヘリコプターで現地へ出かけました。焼け跡からは今だに煙が立ち上っていました。古い友人である老ラマ僧が私の肩に両腕をまわし、涙を流しながら「タンボチェを再建したいんだ」と言いました。そしてシェルパ達は「どうか力を貸して下さい」と、私達に訴えました。彼らは、何とか5万ドルを集めていましたが、再建に要する資金には程遠い額でした。私は、世界中を旅して回り、寺院再建の援助を呼びかけました。反響は大きく、最終的には40万ドルを集める事ができました。寺院建設には4年を費しました。全てが手作業だったのです。

1993年9月22日、私達は再びヘリに乗ってタンボチェへ行き、オープニング・セレモニーに参加しました。一列に並んだ僧達が、スカーフを振りながら歓迎してくれました。門から中庭に入ると、そこには数百人の人々で埋めつくされていました。寺院の中に入る為のメインの扉は、きらびやかなカーテンが下がっており、その扉自体も華やかに

色取られていました。

ネパールの首相や大臣達の祝辞が長々と続きました。彼らは寺の再建に対して、一銭も寄付していませんでしたが、私達は辛抱強く耳を傾けました。

この数年で、寺の内部はさらに細やかに作り直されました。焼け残った数々の貴重な装飾品が並べられ、天井の板には、ブッダの2つの物語が描かれました。現在、残る一つの大仕事——巨大な壁板の色塗りが進められています。

生まれ変わったタンボチェの塔には、素晴らしい塔飾が施されています。以前よりも高くそびえています。シェルパ達にとって、タンボチェ寺院は、宗教と文化の中心です。シェルパ社会の支えである寺院の建設を援助した事は、私達の大きな喜びとなっています。

■挑戦を

私は、幸運にも、胸躍る冒険を幾つか経験してきました。けれども、一番やり甲斐を感じたのは、ヒマラヤ山地に住む人々の為に学校や病院を建てたり、寺院の再建に力を貸した事でした。一生この胸に残るでしょう。

歴史ある美しい建築物の多くは、自然と融合する。また、人間は自然の一部であり、自然は人間の一部である。これらの事を考えると、ヒマラヤの美しい寺院が小高い山の上に建てられ、そして頭上にそびえる氷の峰々に溶け込んでいる様は、全く自然に思えます。ヒマラヤの寺院の様な美しい建築物の保存に力を貸す事は即ち、自然に捧げ物をする事になるのではないのでしょうか。

▼伊香保温泉にて 吉田宏氏提供



「初の…」という行為は、この上ない満足感を与えてくれるという事を、私は知りました。冒険心は誰にとっても大切なものです。何も、南極探検やエヴェレスト登山だけが冒険ではありません。冒険とは、あなたの能力を最大限にひき伸ばす行為であり、挑戦する事によって現われる様々なものと出会う事です。あなたがもし何もしなければ、人生は退屈なものになるでしょう。そんな人生に我慢する事はありません。何か挑戦できる事を見つけて下さい。そうすれば、あなたは、もっと自信をつけ、力をつけ、そして生き生きとした人生を送る事ができるでしょう。

教育や、ビジネス界、技術の分野等での挑戦は重要です。けれども、自然界での挑戦は、あなた達にとって特に価値のあるものとなるでしょう。

(訳：菅原 愛里)

(編注) 本稿は、1997年8月にHAT-Jが主催して開催された「青少年尾瀬国際フォーラム」の一環として、上毛新聞社ホールで行われた記念講演である。

原稿募集

ニュース ヒマラヤ(高地アジア含む)の各地域の社会情勢・現地事情(入山事情)の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀行 遠征、トレッキング、旅 etc…………。

ヒマラヤ及び高地アジアに関する地域なら何でも結構です。“記録”だけではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6～8枚程度、写真3～5枚、横書きでお願いします。

日本からヒマラヤから ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、何でも結構です。

またヒマラヤ地域へ出かけられる方、計画書をご送付下さい。各方面からの問い合わせ用に使用します。

★ 投稿は会員、非会員を問いません。採用分には掲載誌を贈呈致します。

★ 送り先 〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7 萬米ビル501号

日本ヒマラヤ協会機関誌編集部 TEL 03 (3988) 8474 FAX 03 (3988) 8502

ガネッシュ・ヒマールの混乱

ネパールのガネッシュ・ヒマールとして、日本人には馴染みの山群に、最近ちょっとした騒動があった。今秋、日本からⅢ峰登山を目標としていた登山隊が、許可を取得した後、同じ山なのに「Ⅱ峰」として変更届を余儀なくされたと云う。

当山群については、先月号の「ネパール・ヒマラヤの新地図のこと」でも少し触れたが、いずれにしても混乱の最大の原因は、1983年秋にネパール政府によって高度・山名が改訂されたことにあると言えるだろう。ここではこうした混乱が起きた背景を探ってみた。(文責：山森欣一)

1) 1983年春までのガネッシュ・ヒマール

この山群では、78年秋に日本勤労者山岳連盟隊が、Ⅳ峰(パピル)に初登頂。79年秋には岡山大学隊がⅡ峰(ラプサン・カルボ)に初登頂。81年秋に九州歯科大学隊がⅢ峰に同日第二登。80年秋にも慈恵医科大学隊がⅤ峰に初登頂。さらには、80年春と82年秋に信州大学隊がⅢ峰にトライ。80年秋に愛知合同隊がⅢ峰にトライ。81年春に日本大学隊がⅢ峰にトライするなど、まさに日本隊の活躍が突出していたのである。

そして83年春のシーズンまで各峰の山名と高度については使用されていたのは以下のとおりであった。

I 峰	7,406m
Ⅱ 峰 (ラプサン・カルボ)	7,150m
Ⅲ 峰	7,130m
Ⅳ 峰 (パピル)	7,102m
Ⅴ 峰	6,950m
* Ⅵ 峰	6,460m
Ⅶ 峰	6,350m

2) 1983年秋の改訂

ネパール政府は、83年8月26日に新しい許可峰リストを発表した。このことについては、「岩と雪100号」に薬師義美氏が詳しい解説記事を執筆している。薬師氏がその中で指摘しているように、この時に発表された数値には、幾つかの誤りが見られた。

薬師氏は、ガネッシュ山群の項では次のように指摘している。長くなるが重要なので引用すると、
「ガネッシュ山群も追認する手立てがない。主峰が23メートル高くなり、さらにヤングラという名称が加わった。Ⅲ峰にもサラスゴの名前が付け

られた。この付近は71H/3の新地図が眺められたらとつくづく思う。

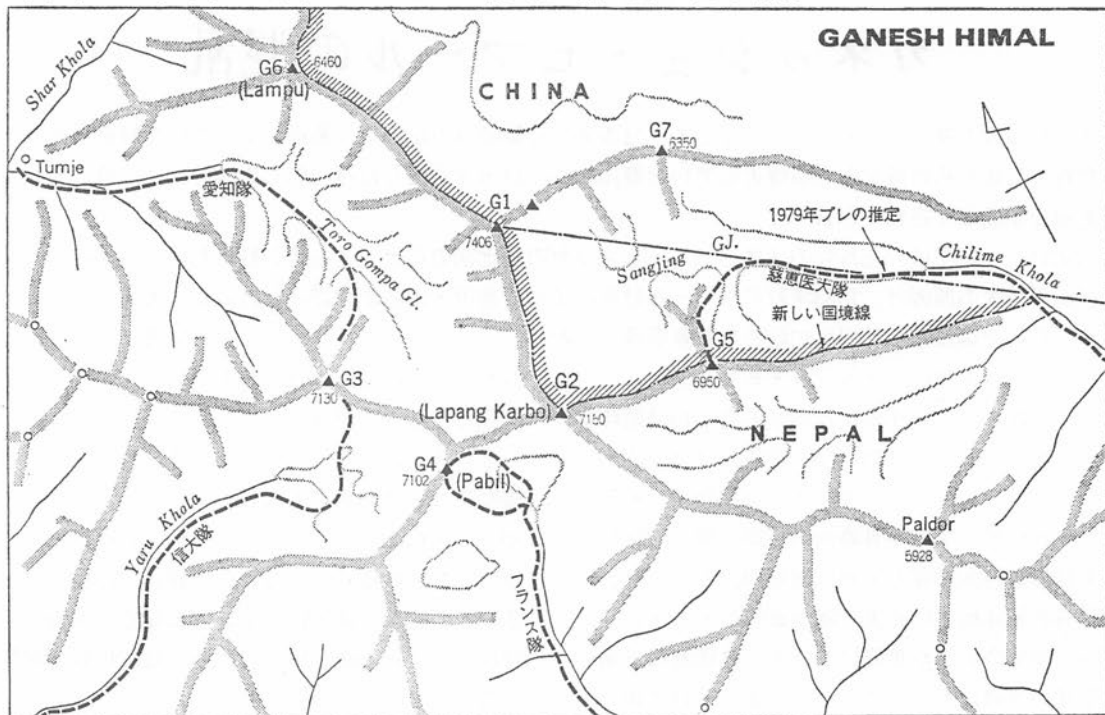
ところが、このガネッシュのⅡ、Ⅲ、Ⅳ峰の経緯度について注意してもらいたい。手元の学研の地図で座標を決めてみると、Ⅱ峰とⅢ峰がほぼ位置を入れ替わることになり、Ⅳ峰は入れ替わったⅡ峰の、すぐ南隣りにくることになる。Ⅰ峰とⅤ峰はほとんど動かないから、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ峰に混乱があるのではなかろうか。

この山群は高度順にナンバーがつけられていたので、新高度で順序が入れ替わったのだろうか。つまり、これまでのⅡ峰(7,150m)が7,110mとなってⅢ峰に、またⅢ峰(7,130m)が7,110mとなってⅡ峰になったのか。この二つの関係だけなら、まだ納得もいくが、Ⅳ峰の大移動はどうなるのか。およそ3.4キロも北北西に動いている。1978年の労山隊のⅣ峰初登頂、79年の岡山大学隊のⅡ峰初登頂の記録を参照しても、ネパール当局の発表する経緯度に首をかしげざるを得ないのである。]

この83年秋の山名・高度の改訂は、ネパール政府観光省発行の「開放(許可)峰」にもそのまま記載されることになった。現在私の手元には観光省発行の85年版と93年版の登山規則集があるが、それによればガネッシュ山群については、

(B) Ganesh I (Yangra)	7429
	28 23 30 85 07 38
(C) Ganesh II	7111
	28 22 45 85 03 32
Ganesh III (Salasungo)	7110
	28 10 07 85 07 19
Ganesh IV (Pabil)	7052
	28 22 17 85 03 43

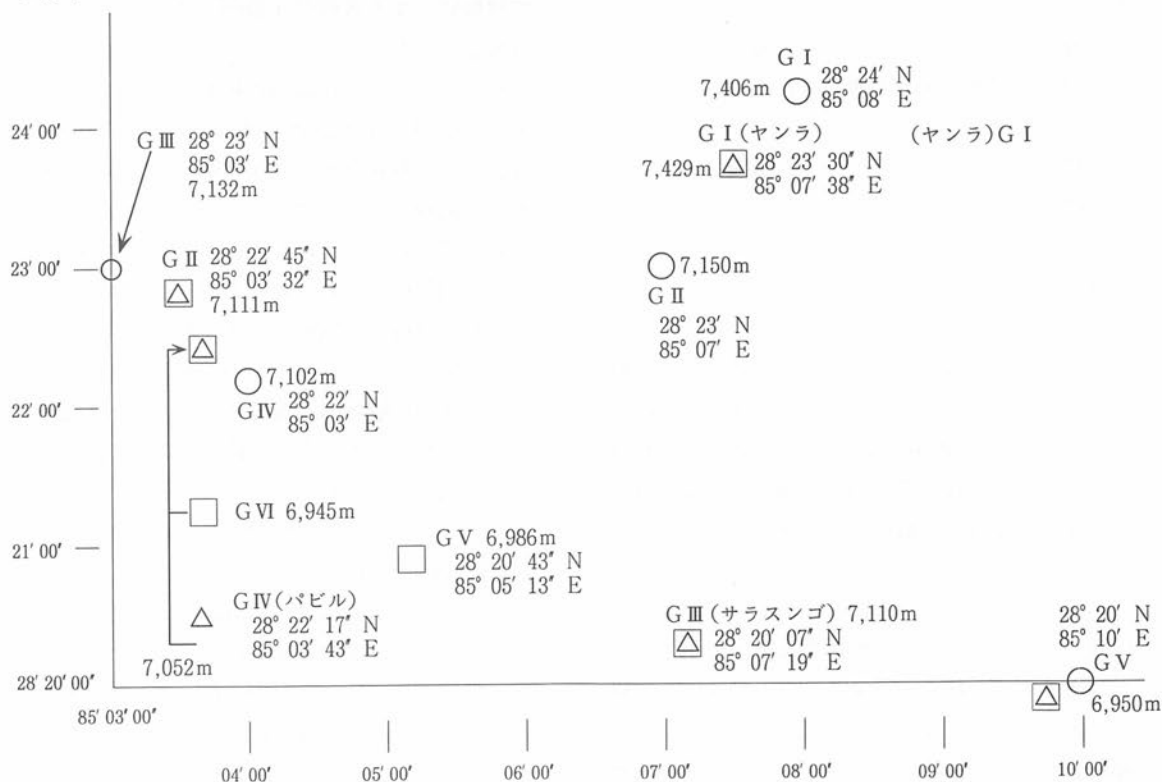
(図1) 1980年当時のガネッシュ・ヒマール概念図 (岩と雪81号から転載)



(図2) ガネッシュ・ヒマール新旧対比概念図

[○印コンサイス外国山名辞典、△印1983年秋観光省公表、□印 A]

(作図：山森欣一)



28 19 53 85 09 49

83年秋の改訂として公表されたものが、そのまま継続して記載されているのである。

(注1)のⅡ峰とⅢ峰の位置が入れ替わったことについては、どのような理由なのかははっきりとしないが、考えられることは、中国との国境策定の協議の折りに、国際線上にあるⅠ峰には「ヤンラ・カンリ」Ⅱ峰には「サラスンゴ」の名称を使用することで合意したのではないか。その結果ネパールはⅠ峰に次ぐ高度を持つⅢ峰に「Ⅱ峰」の名称を与え、Ⅱ峰は時期を見てサラスンゴと改称するつもりではなかったのか。そうすると、従来ネパール側でラブサン・カルボと呼ばれていたらしいⅡ峰の別称について、ネパール側はそれほどの認識もなく、さほど固執しなかったのかもしれない。とこれは推測である。

(注2)のⅣ峰の大移動であるが、これは完全にネパールのミス、勘違いである。83年秋の改訂時の別の資料(これをAと仮称する)によれば、

Yangra (* Ganesh I)	7429.3
28 23 30 85 07 38	
無名峰 (* Ganesh II)	7111
28 22 45 85 03 32	
Pabil * Salasungo (* Ganesh III)	7111
28 20 45 85 04 47	
Salasungo * Pabil (* Ganesh IV)	7052
28 20 07 85 0 19	
Pabil * Ganesh V	6986
28 20 43 85 05 13	
無名峰 * Ganesh VI	6945
28 22 17 85 03 43	
無名峰 * Ganesh V	6816
28 19 53 85 09 49	

となっている。(*印は手書きのもの。—は抹消。)

これから推測すると、公表されたⅣ峰の座標は明らかに「Ⅵ峰」のものであり、単純に、とても似ているⅣとⅥを取り違えたものと考ええる。それでは、正しいⅣ峰の座標はどこにあるかといえば、AのⅤ峰6986の位置にある。

Aには上記にもあるようにⅤ峰が二つ掲載されている。6986mと6816mの二つであるが、前述し

たように6986mの座標はⅣ峰のものであるから、正しいⅤ峰は6816mの座標であろう。

したがって観光省が公式に発表した山名・高度の基礎資料になったと思われる「A」が作成された後、誰かの指摘で、無名峰だったピークや有名峰に手が加えられ、これらの段階で山名の取り違えや、高度の間違いが起こったのではないかと推測する。

83年秋の改訂が、中国との国境策定を終えていた時期であることは間違いがない。そのようなことを前提にして、中国の地図を見ると、Ⅱ峰の位置にサラスンゴ(ネパールの新Ⅲ峰)があり7052mとなっており、Aの訂正する前と符合する。またⅤ峰の位置には連峰としてサラスンゴ・カンリの標記があり6816mとなっており、Aの無名峰(ガネッシュⅤ)と符合している。したがって国境線上にある、Ⅰ峰はヤンラ・カンリ7429m、旧Ⅱ峰はサラスンゴ(新Ⅲ峰)7052m、Ⅴ峰6816mで落ち着くのではないだろうか。

残るはネパール領内のⅣ峰であるが、座標は前述したようにAの訂正する前のパビル(ガネッシュⅤ)にあり、高度はAの訂正する前のパビル(サラスンゴ・ガネッシュⅣ)7110となるものと思われる。

3) ガネッシュⅥ峰とⅦ峰について

従来のⅥ峰とⅦ峰については、図1のような位置であった。ただしⅥの()内のランプーは誤りである。

しかし、前述したようにAでは、Ⅵ峰を新Ⅱ峰の南側にあるピークとしているし、Ⅶ峰は中国領内となり、名称も「普永」と明記されている。このような事実を踏まえるならば、今後は、Ⅵ峰はネ政府の公表の位置のものとし、普永についてはⅦ峰という呼称を止めるべきであると考ええる。

4) 最大の問題点

混乱の最大の原因は、ネパール政府観光省が継続して発行している、「開放(許可)峰」リストの間違いを訂正せずに、従来のⅢ峰が公表したリストではⅡ峰になっているのに、登山隊のⅢ峰申請に対して従来どおりⅡ峰を許可していたことにある。(別表の入山表を参照)

また、公表リストのⅣ峰の座標の誤りを訂正し

ていないことも理解に苦しむ。

83年秋の改訂以来、約15年も経過しながら、このようなことが登山者の話題にすらならなかったことが不思議ですらある。

5) ネパール新地図との関連

先月号で紹介したが、新地図のガネッシュ・ヒマールの各峰は下記のとおりとなっている。

ヤンラ (ガネッシュ I)	7422m
ガネッシュ II	7118m
サラスンゴ (ガネッシュ III)	7043m
パビル (ガネッシュ IV)	7104m
ガネッシュ V	6770m
ガネッシュ VI	6908m

* 戦後のガネッシュ・ヒマール登山の概要

年	山	高度	登山隊	成否
1978秋	パビル	7102m	労山	◎
1979秋	II 峰	7150m	岡山大学	◎
1980春	III 峰	7130m	信州大学	×
1980秋	III 峰	7130m	愛知合同	×
"	IV 峰	7102m	フランス	×
"	V 峰	6950m	慈恵医大	◎
1981春	III 峰	7130m	日本大学	×
1981秋	III 峰	7130m	九州歯科大学	○
"	III 峰	7130m	ドイツ	◎
1981秋	IV 峰	7102m	オーストラリア	×
1981冬	IV 峰	7102m	アメリカ	×
1982秋	III 峰	7132m	信州大学	×
"	IV 峰	7102m	韓国	○
1983秋	II 峰	7111m	ポーランド	×
"	IV 峰	7052m	アメリカ	×
1984秋	II 峰	7111m	イギリス	○
"	II 峰	7111m	スイス	×
1985秋	I 峰	7429m	韓国	×
"	IV 峰	7052m	ポーランド	×
1986春	I 峰	7429m	スイス	×
"	II 峰	7111m	韓国	×
1987秋	V 峰	6986m	福井山岳会	○
1988春	III 峰	7110m	アメリカ	×
1989秋	IV 峰	7052m	スペイン	×
1992春	III 峰	7110m	韓国	×
1994秋	IV 峰	7052m	スロベニア	○

ネパール政府観光省では、1990年に6,000m 峰 5 座 (ガンチェンボ、ウルキンマ、グル・カルボ・リ、ベンダン・リ、ガンダルバ・チュリ) を外国隊に開放すると発表したが、同時に次の3つのピークについて「新高度」を発表した。

ガネッシュ・ヒマール II	7,163m (旧 7,111m)
ランタン・リルン	7,225m (旧 7,234m)
ネパール・ピーク	7,168m (旧 6,910m)

(下図)

ネパール 1/50,000 新地図によるガネッシュ・ヒマールの山名と標高概念図 (作図: 大西保)

(Sheet No.2885 09)

中国側は Mount Xixabangma 1/100,000 図による (但しこの地図には国境線の記載はない)

■■■■■■ 中国領内山稜 ■■■■■■ ネ・中国境



追悼

原田 達也

広島 三朗

中込清次郎

8月20日午前1時15分、スキル・ブルム峰の登頂に成功した神奈川ヒマラヤ登山隊のベース・キャンプを一瞬にして吹き飛ばした巨大な氷河雪崩。

この事故で亡くなった6名のうち、広島、原田、中込の3名は、H A Jの会員であった。

3名の登山界での活躍のほどは、それぞれ随所で語られ、紹介されている。ここでは、私との関連で3名の活躍の一端を紹介し追悼にしたいと思う。

(記：山森 欣一)

原田 達也 (Harada Tatsuya)

1935.4.6 - '97.8.20 享年62歳

入会：1995.4.1 会員番号2452番

原田さんに初めて出会ったのは、1978年1月に成田で開かれた日山協海外登山研究会の席上であった。原田さんは前年K2登山隊の副隊長として参加したが、戦略担当としてこの会議でK2報告を行った。私は、その司会を担当していた。前述のように私達H A Jでは、カンチェンジュンガの南峰～中央峰～主峰を縦走しようと準備中であり、この会にも中心メンバーが多く参加していた。カンチのメンバー達の注目は、K2隊が持参した酸素ボンベの数と登頂予定数との関連であった。その矛盾について質疑が続いた。込み入った論戦になったので、私は司会者として質疑の打ち切りを行った。終了後、メンバーからこの点についてクレームがあった。夜の酒の席では、昼間の質疑打ち切りに満足しなかった私の後輩である亀井にしつこく絡まれたと後日原田さんから聞いた。

原田さんは、大船のドリーム・ランドに勤務していたので、日山協の会合はよくここを会場として開かれたが、一時、奈良の方にも仕事があり、私も、85年には日山協の海外常任委員を離れたため、それ以後は、日山協の2月や6月、ヒンカラなど年に2～3回会う程度であった。それでも、H A Jの壮行会には多摩川を越えてよく顔を出してくれ、それぞれの隊の御礼儀まで気を遣ってくれた。



私が日山協の委員の頃、原田さんから言われた中で一番心に残っていることは、毎年の研究会に「長老」をどうして呼ばないのか？と云うことであった。原田さんは必要な時だけ呼んで、後は知らない振りは失礼ではないか？と云うのだ。これは一理も二理もあるのだが、当時の日山協の研究会に対しては、「マンネリ、同窓会」などの悪評があり、古いメンバーが固定されることを嫌がる風潮があった。このことを裏返すように、原田さんは委員を辞退せず現役の副委員長、委員として委員会に残り、自分の立場も分からない若い委員達と研究会を開催し、下働きをし続けた。委員会に対する愛着振りとその信念には敬服せざるを得ない。

95年2月上旬、池袋にてJ A Cマカルー隊の壮行会が開かれた。その帰りに原田さんを移転したばかりの事務所に誘い、酒を飲みながら原田さんが秋に行くというシシャパンマ登山の話をした。私は「シシャパンマは難しい。雇用保険を優先した方がいい。その後チョー・オユーに行った方が

いい。」と説得した。しかし、原田さんは、余程自覚していたのか、「今登らないと駄目だ、1年も2年も待てない気がする。」と秋の登山に固執した。

結果は相当苦労したようだったが、中央峰の登頂に成功した。私がシシャパンマに反対したのは、余程の条件が揃わない限り、登山隊はシシャパンマ主峰ではなく、中央峰に登ってしまうことにもあった。私には、そこはシシャパンマの頂上とは思えないからでもあった。原田さんには、すっきりと八千メートルの頂上に立って貰いたいと思ったのである。

原田さんは昨年秋、絵の展示会を開いた。台風の去った月曜日に田中祥治夫妻と一緒に相模原

の会場に行ったが、公民館のため月曜日は休館であった。連絡すると迎えに来てくれて自宅で御馳走になった。実物の絵を見ることはできなかったが、写真に整理されている絵を見て、私は、思い出のクラウン峰を予約した。原田さんは、私の11年前の81年秋に日本人としては、初めてクラウン峰を見たのである。私は、その2年後に中国登山協会からクラウン峰の登山許可を貰った。そして92年秋に現地でクラウンを見たのである。原田さんの描いたクラウンは今私の家の玄関を飾っている。

やっぱり達つあんと呑めないのは寂しい。6月14～15日福岡での日山協遭対研で会ったのが最後となってしまった。

広島 三朗 (Hiroshima Mitsuo)

1943.3.28 - '97.8.20 享年54歳

入会：1970.12.19 会員番号352番(終身会員)

広島さんに初めて出会ったのは、1976年に蒲郡で開かれたHKTの席上であった。その頃、ヒンズークシュ・カラコルム会議(HKT)ではK2登山を企画推進していたし、オープンしたばかりの「カラコルム」に登山者が殺到する時代でもあり年に一度の集会は、情報を求める登山者で大盛況であった。

私もHAJの75年ヌン登山を終えて、自分の所属する会からカラコルム登山隊を派遣すべく準備を進めていたのでカラコルムの最新情報をあてにして何人かの仲間と出席した。その集会の夜の席で、飲んで大声を上げている姿を見たのが広島さんを見た最初だったと思う。

77年春に、私は都岳連海外委員長として、日山協の海外常任委員となったので、それ以後は毎月顔を合わせていたのであるが、やがて、K2登山を終えた広島さんが、日山協の海外委員長に就任した。広島さんが海外委員長の重責を担っていた時代に、私が関係した二つの出来事があった。

その一つは、海外登山(具体的にはネパールとパキスタン)に対する「推薦状」問題であった。既に形骸化していた推薦状ではあるが、その発行



に至るまでに国内手続きで時間がかかり、登山者にとっては不便このうえない状況であった。そこで私と尾形の連名で、委員総会の席上で「推薦状を撤廃」することを申し入れたのである。現状をよく知る各地の委員も、その席上ではおおむね私達の提案に賛同してくれた。ところが、翌朝になると、突然某氏が出席し、私を批判したのである。某氏の要旨は「山森はHAJでできないことを日山協の名前でやるんじゃない！それは、日山協の会長に外務省に行って謝れということだ！」であった。驚いたことに某氏は、登山者のためになることに反対するのであった。某氏にとっては推薦状がなくても許可を取得できる手段があったのである。まとめる立場にある広島さんは、苦慮した結果、折衷案を出し「推薦状制度は現行のままとし、日山協では書類の不備さえなければ、推薦状を自動的に交付する」と提案し、決定された。これに

付随して日山協が推薦状を交付したら、ネパール政府観光省にコピーを送ることなどの便宜措置も決まり、多少なりとも登山者のためになる変更が行われたのであった。

その二は、海外登山（基本的には高峰登山）遭難対策研究会の開設であった。日山協では毎年1月（84年から冬期登山に対応するため2月）に海外登山技術研究会を開催しているが、この会はどちらかと云えば、高峰登山の最先端を対象とした研究会である。

しかし、ヒマラヤ登山の大衆化が叫ばれ、経験の少ない登山者でも、ヒマラヤ登山を楽しめる時代が到来した。その結果、遭難件数も増え、また同じような原因による遭難が繰り返されるようになってきた。

そこで日山協では、最先端の研究会だけではなく、事故防止の啓蒙活動にも取り組むことになったのである。委員会の席上、広島委員長から私が中心になって進めるよう依頼されたのである。

私は、丁度カンチェンジュンガ縦走の準備中であり、偵察隊として3月に出発し、3ヶ月ほど日本を留守にするものの、登山者の利益になるこの事業を何とか実現させたいと考え引き受けた。そして、カンチェンジュンガのベース・キャンプで構想を練り、ベース・キャンプから広島さん宛てに研修会の素案を送ったのであった。

6月に帰国してみると準備はあまり進んでいなかったが、なんとか9月には開催にこぎつけることができた。私はこの時に、資料として「ヒマラヤ登山（6,000m未満のピークを除く）における日本隊の死亡事故集計表（1970年-79年=10年間）」を提出したが、これによって、ヒマラヤ登山に向かった40人に一人が死亡していることを、多くの登山者に知られることとなった。現在でもこの研

修会は毎年6月に開催されており、今年は福岡で開催され、私も講師として「肺水腫からの脱出」経験を報告した。

広島さんは忙しい人であったが、体験したことを多くの文章や著作に残し、また講演することによって登山者に還元してきた。また、最近ではヒンズー・クシュ、カラコルム研究会をかっての、情報交換の場とすべく努力し、昨年も盛況であったが、会場で会うとそのことをとても嬉しそうに話していた。

H A Jでは、サマー・キャンプを中心にヒマラヤ登山希望者に、登山の場を提供しているが、その方法などについては、各方面から様々な指摘がある。広島さんも、H A Jのように誰でも連れて行くような方法には批判的であったようだ。ある時「山は想い入れがなくては！」と聞かされたことがあった。

チョゴリザ登山が許可の関係で難しいと云われた時、私は広島さんに言った。「ここが広島さんの正念場ですよ。チョゴリザに想いを込めてきた人達を解散させて登山を中止するか、やりくりして集まってきたメンバーに登山の機会を与えるために転進するか。」結果的に広島さんは後者の道を選択した。勿論経緯にはいろいろなことがあったのだろうが、少なくとも一番悩みながらも決断したのは広島さんだったに違いない。

広島さんは、正直な人なので誤解を受け易いことを云ったりすることも多かったが、自分に忠実に生きてきたと思う。そのような生き方ができることが難しいことを考えれば、とても幸せな人生であったと言えるだろう。しかし、寂しい。7月3日の西山暉大さんの会で逢ったのが最後となってしまった。

に入ろうと一人で新宿発20時過ぎの普通電車に乗った。ボックス席について落ち着いた時、目の前に坐っていた人が「山森さんですか？」と声をかけてきた。それが中込君だった。彼は、呑み会の帰りであった。

車中でヒマラヤの話が続いたが、話している内に、彼もH A Jが交渉中のカラコルムのリモ峰

中込清次郎 (Nakagomi Seijiro)

1947.2.26-'97.8.20 享年50歳

入会：1984.1.21 会員番号1737番

中込君に初めて出会ったのは、1983年12月下旬の暮れも押し詰まった夜であった。私は、八ヶ岳

に関係していることが分かった。しかし、彼らのリモ峰の許可は望み薄のようであった。

今はもう思い出せないが、多分、私がクラウンの話しをしたのだろう。彼も行きたいと云う。そんな関係で年が明けた1月にH A Jに入会したのであった。

クラウン峰登山を夏にするか秋にするか、そして84年の許可をどうするか、随分と検討した結果、85年秋と決定した。クラウンには元々私が行くことで準備を進めていたが、ナムチャ・バルワ登山実現のため、私は85年秋にはギャラ・ペリの偵察に行くことになった。H A Jにとって、85年は大変多忙な年であった。春には、黄河源流域の探検に八木原、夏のK 2に飛田、秋のガンカル・プンスムに尾形、ギャラ・ペリは私である。この他に中国との合同女性隊のムーシュ・ムスターグが夏、インドとの合同サセール・カンリII。クラウンは、カラコルム派は云うに及ばず、岳人の誰もが憧れる堂々とした未踏峰であった。折良く、75年E X P研でインドに行った舘野がクラウン峰登山隊を打診してきた。私は、早速彼を口説いてクラウン登山を任せた。初顔合わせの11人が長期間の遠征で事故も無く登山できた裏には、舘野の手腕もさることながら、副隊長として裏方で支えた中込君の誠実さがあつたればこそと感謝している。

93年夏、私は中国・青海省の省都である西寧の



ホテルで中込君の訪問を受けた。アムネマチン登山のため一足先に西寧入りしていた彼が、ユイチュ登山のため到着した私の部屋を訪ねてくれたのである。山梨岳連が中国登山を目指すということで、出発前に少し情報の提供をしたのであるが、隊長と共にあいさつに訪れたのである。私はこのことに、中込君の社会人として真っ当な生き方と、誠実さを見、感心した。物事がキチンと分かっていると、このようなことはなかなかできるものではないからである。

4度目のカラコルム行きで、K 2とクラウンを見ながら立ったスキル・ブルムの頂で中込君は歓喜すると同時に、K 2でクラウンと共に戦った今は山に倒れた友の冥福を祈ったに違いない。それなのに、何という運命の悪戯であろうか。2月の日山協、海登研が最後となってしまった。

地図と図書の販売

1. 地図 (いずれも中文1枚1,500円 送料込み)

- 珠穆朗瑪峰: 10万分の一 (東はマカルーから、西はチョー・オユーまで)
喬戈里峰: 10万分の一 (東はガッシャーブルムIから、西はクラウン、チリンまで)
公格爾山-慕士塔格: 10万分の一 (コンゲールとムスターグ・アタである)

2. 地図 (いずれも1枚2000円 送料込み)

- 青蔵高原山峰図 縮尺1:2,500,000 中・英文あり
中国山峰一覧図 縮尺1:5,500,000

3. 図書

- 中国登山指南 (4,500円+送料340円) 中文
雪域神山 (6,000円+送料700円) 写真集。10冊

4. 刊行物

- 中国登山の手引き 第4版 300頁

- 中国領ヒマラヤ、カラコルム登山手続きを詳細に解説、資料多い。 3,800円 送料400円
東部カラコルム 103頁

- サセール・カンリ、スモストン・カンリ、リモ山群の登山報告とインド領カラコルムの山々紹介 2000円 送料240円

- 知られざる北部シッキムの山々 82頁

- カンチェンジュンガ、ピラミッド・ピークの登山報告と北部シッキムの山々の紹介 2000円 送料240円

地域ニュース

《中国》

日本人グループ徒歩で中パ国境越え

徒歩で中国～パキスタンの国境越えに挑んでいた青森県八戸市を中心としたウォーキングクラブ「MTC21」（山本光一代表）が、新疆ウイグル自治区カシュガルからパキスタン北部のフンザまで約366kmの踏破に成功した。一行は女性7人を含む30～60代の24人で7月下旬に中国入りし、8月3日から高度順化しながら6日から11日にかけて国境越えに挑戦し、成功した。

同クラブはこれまで、1983年から三度にわたりシルクロード計1,450kmを歩いており、最終的にはローマまで歩くことを目標にしている。今回は、結成二十周年を記念し、3年がかりで計画を練り、「第四次シルクロード」と銘打って行った。パキスタン税関によると、グループでの国境越えは同隊が初めてとの事。

（8.21 デーリー東北、東奥日報）

シシャパンマの日本隊動向

中国地質大学と長野県山岳協会（日本側清水澄隊長以下3名）が合同でシシャパンマ（8,012m）に挑む。登山隊はネパール経由で現地入りし、9月2日BCで中国側と合流、9月28日まで登山期間としている。

また、7月下旬に日本を出発して同峰を目指していたマウンテン・ゴリラ隊（安村淳隊長以下8名）は登頂を断念した模様である。詳細は不明。

中国、パンダの体外受精に初の成功

8月30日の中国紙、深圳特区報が新華社電の報道として伝えたところによると、このほど四川省成都市で初めてパンダの体外受精に成功した。

四川連合大学の馮文教授などの指導で、パンダの研究を行なっている、成都大学の実験チームは、8月4日に死亡した雌のパンダの卵巣から卵母細胞をとり出して成熟させ、雄からとった精子を受

精させた。

パンダは繁殖能力が低く、現在千頭足らずしか生息しておらず、体外受精の成功は繁殖に明るい材料となる。

今回の体外受精成功後の受精卵の模様について新華社電は触れていない。

（注）上野動物園飼育課によると、中国では雄の精子を採取し、雌の体内に注入する人工受精には成功しているが、体外受精は世界で初めて。同課では「今回は雌が死んだから試みたのだろう。出産までには多くのハードルがある」と話している。

（8.31 東京新聞）

《インド》

カシミールで銃撃戦

インド国防省スポークスマンが30日明らかにしたところによると、パキスタンと帰属をめぐる争っているカシミールで、29日から30日にかけてインド軍とイスラム過激派の銃撃戦が起き、インド兵1人と過激派6人の計7人が死亡した。

29日、パキスタン側から越境してきた過激派3人をインド兵が殺害。30日にはインド軍キャンプに手投げ弾が投げ込まれ兵士が負傷するなど、カシミール各地の戦闘は15時間続いたという。

（8.31 東京新聞）

カシミールでまたも砲撃

PTI通信がインド国防省筋の話として伝えたところによると、ジャム&カシミール州ノカルギル地区で2日夕、パキスタン軍が砲撃し、インド兵4人と民間人1人が負傷した。（9.4 朝日新聞）

英国女王の黄金寺院訪問に難色

インドのPTI通信が伝えたところによると、10月にインドを訪れる英国のエリザベス女王が滞在中にパンジャブ州アムリツァルへの訪問を希望していることについて、インドのグジュラル首相は「女王は現地に行かない方がいい」と難色を示し、英国政府に思い止まるよう助言した。

アムリツァルでは1919年4月、反英集会に参加

した約二万人の住民に英軍が無差別発砲し、千五百人以上が死傷した。「アムリツァルの虐殺」として知られ、この事件をきっかけに独立運動が一段と活発になった。

虐殺現場は現在、記念公園になっており、当時の発砲による銃弾の痕跡が残るレンガの建物などがそのまま保存されている。

独立半世紀を迎え、最近では地元の一部知識人らが「英国は当時の犠牲者に補償すべきだ」と主張したり、パンジャブ州首相からも「英国がパンジャブの藩王家から持ち去ったダイヤの王冠を返却すべきだ」という声が出たりしている。

PTIによれば、エリザベス女王は、同地にあるシーク教徒の本山黄金寺院と、同寺院の近くにある虐殺現場の公園を訪れたいとの希望を抱いているという。グジュラル首相が難色を示しているのは、治安上の問題と住民感情を考慮してとみられている。

《パキスタン》

分離・独立50周年を迎えた インド・パキスタン

インドとパキスタンが英国の約二百年にわたる植民地支配から分離・独立して半世紀。8月14日にパキスタンが、翌15日にはインドが独立記念日を迎え、それぞれに独立記念式典を開いた。しかし、独立半世紀を祝う両国の雰囲気は国情の違いを反映し、明暗が際立っている。

パキスタンのナワズ・シャリフ首相は14日、独立50周年を記念する声明で、「建国の父、ジンナー総督が目指したように、寛容で民主的なイスラム国家の建設をいま一度思い起こさねばならない」と訴え、各政党の指導者に政治的違いを乗り越えて宗教セクト間の流血暴動や貧困などをなくすよう協力を求めた。

あわせて同首相は、「インドとの友好の進展を望んでいるが、カシミール問題は座視しない。本当の独立はカシミールの人々が我々と一緒になった時だ」と語った。

パキスタンは、インドとの軍事対立に伴う巨額

の軍事費負担と慢性的な対外債務の圧力などで経済は低迷し、経済改革で勢いづくインドとは対照的である。

一方、インドのナラヤナン大統領は15日未明、特別招集された国会で「インドは民主的な政治制度を確立したが、貧困や無知、疾病を根絶することはできなかった」とこれまでの半世紀を総括、「21世紀の大国」を目指してさらに前進しようと国民に呼び掛けた。

また、独立50周年を祝うインドの記念式典で演説に立ったグジュラル首相は「インドはパキスタンとの友好的な関係を望んでいる。しかし、国家主権やテロについては決して妥協しない」と語った。その上で「印パは互いに内政干渉せず、双方の国境を尊重すべきだ」と強調し、カシミールの分離・独立を唱える武装グループへのパキスタン側の支援を牽制した。

インドの核政策については「超大国が保有する核兵器を破壊しない限り、インドはいくら外圧があろうと、包括的核実験禁止条約（CTBT）に署名することはない」と改めてインドの固い姿勢を明確にした。

印パ両国は、分離・独立の時に双方で約千二百万人の難民が出、約五十万人が虐殺された。独立後も両国は、カシミールなどをめぐって三度の戦火を交え、両国の核の問題は世界の大きな関心事になっている。

対立関係にある印パではあるが、今年5月に両国首相が8年ぶりに公式会談するなど、雪解けの兆しもある。（8.15 朝日新聞 8.16 東京新聞）

インフォメーション

P.メイヤーズ作『K2』再び舞台化

かつて『K2～ハロルドとテラー～』と題され舞台化された、パトリック・メイヤーズの『K2』が本多劇場15周年記念公演で再舞台化される。

記

日時：'97年10月24日（金）～11月22日（土）

題名：K2～運命のザイル

会場：下北沢本多劇場（小田急線・京王井の頭線

下北沢南口1分)

問い合わせ：加藤健一事務所 ☎ 03(3557)0789

尚、大阪公演は11月26日(水)～30日(日)

近鉄劇場(☎ 06(771)1009)の予定。

※「K2」は二人芝居。世界第二位の高峰「K2 8,611m」の登頂に成功したハロルド(加藤健一)とテラー(上杉祥三)。二人は下山途中で雪崩に合い、まさかの遭難。余儀なく生死の境をさまようことになる。零下40度、酸素は下界の三分の一。二人は今までの人生を淡々と語り始める。日没まであと2時間。日没はイコール「死」を意味する。二人の男に残されたのは1本のザイル。美しくも残酷な「K2」の氷壁が、今回の舞台である。演出は綾田俊樹。

Books

神々の山嶺

集英社刊

夢枕獏が、エヴェレストを舞台に「マロリとアーヴィンは果たして初登頂に成功したか」を持参した筈のコダック社のカメラの存在から探り、日本人の一匹狼の山男が「エヴェレスト南西壁の冬期単独登頂」に挑む。その過程を実在した人物達とオーバーラップさせて描く。上下2巻各1800円。

マカルー東稜

1995年春、中国側からマカルーに登頂した日本山岳会登山隊の記録。

目標としたのは「東稜」であったが、東稜の核心部である上部は登れなかった。しかし、判断よくプラトーにエスケープし、登頂に成功した。

重廣隊長は、群馬の冬期サガルマータ南西壁からの登頂をもって「ヒマラヤ鉄の時代」は成熟期を迎え、今後は岩壁の時代から、ルートの複雑さによって、高度な技術と体力、そしてそれらの総合力である耐久力を必要とする、長大な稜線をたどる時代に突入したことを実感して、このルートに挑むこととなったと報告している。

群馬は、まさにそのことを20年前に自覚し、グウラギリI峰の長大な南東稜に挑戦し、4名の遭難者を出しながらも完登したのである。そのこと

が、冬期サガルマータ南西壁の基盤になっているのである。

指揮官である重廣隊長のそのような決意からするならば、核心部をトレースできなかったという現実、意識レベルの高い隊員にとっては、「自らのもつあらゆる意味での貧困さに負けた」と云う反省もうなずけるものがある。

初期の段階での日程の遅れもさることながら、東稜の難易度が、今回結集したメンバーの登攀能力の遥か上にあったと云うことになるのだろう。

東稜は完登できなかったが、処女地に分け入る隊として、環境保全に全力を尽くしたことが報告されている。テイクインの段階で隊荷の5%に相当するスリム化を実施し、乾電池類3,000本を日本に持ち帰った。大部隊に限ってこのようなことをおろそかにしがちであるが立派なことである。また、気象についても詳細に報告があり、情報の少ない地域であるので、今後の登山隊にとっては参考となるだろう。

A4判上製 128頁(4色口絵32頁・1色本文96頁) 山と溪谷社 4,000円(税別) 9月20日刊

30周年資金協力者ご芳名

10口(遠藤登)、7口(後藤文明)、5口(山田豊、吉田秀樹・文江、野沢井歩)、3口(山崎幸二、岩崎栄、橋本康弘・珠樹)、2口(住吉仙也、江塚進介)、1口(白沢真弓、大久保博、平川宏子、渡辺真澄、田島崇行、桜沢善之助・美佐子、南麩、森川洋佑、竹内千恵、星野貢、滝田収、上原昭則、加藤孝子)

総計147名 3,307,000(1997.9.23現在)

東京集会のお知らせ

日時 10月27日(月) 午後7時～

ニンチン・カンサ隊報告

場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

スキル・ブルム峰氷河雪崩事故と教訓

■登山の概要

神奈川ヒマラヤ登山隊(広島三朗隊長以下16名)は、8月17日に広島、中込、古関正雄(36)、土森譲(60)、松田謙介(54)、菊田佳子(37)、初鹿裕康(36)、鎌田実(35)の8名をスキル・ブルム(7,360m 中国の地図では無名峰で7,410m)の頂上へ送り込んだ。1957年オーストリアのM.シュムックとF.ウィンターシュテラーの初登頂以来の成功であった。

ルートは、スキル・ブルムの南2.4kmにあるブラクパ・リ(7,156m 中国の地図では無名峰で7,134m)との間にあるブラクパ氷河から、約6,500mのゴルに上がり南西稜に取りついた。登山隊はゴルの上下6,100mと6,700mにC1とC2を設けてアタックした。8月に入って悪天が続いたため、8月11日にC2を建設したものの、翌日のアタックは悪天のため中止。15日の古関ら3名による二次アタックはラッセルが酷くて6,900m上で断念。16日にも広島隊長ら5名の三次アタックも7,000mで時間切れとなった。そして四次アタックで念願の登頂を成し遂げ、19日には全員がBCに集結し、登頂祝いも終わって20日には下山の予定であった。

■事故の概要

時計が20日になって一時間と15分後に運命の懸垂氷河の崩落が起こったのである。現場からの証言を聞き限り、今回の懸垂氷河の崩落は巨大なものであったようなので、氷河雪崩の走路によっては、被害が全員に及んでも不思議はなかった。そういう意味では、7張りのテント全部に被害があったにもかかわらず、全員遭難と云う事態に至らなかったのは、不幸中の幸いというべきかも知れない。

このような事故では、助かった者と遭難した者との差は全くの偶然に過ぎないのだろう。報告に

よれば、同じテントにいた二人が、40メートルも吹き飛ばされ、二人ともほとんど意識がなかったのに、片方は助かり、一方が死亡するなどという明暗が、全くの偶然であることを物語っている。

■氷河雪崩について

今回の雪崩を「雪雪崩」と区別して「氷河雪崩」と呼んでいる。ここで言う氷河雪崩とは、懸垂氷河の崩落によって引き起こされる雪崩や、氷塔の倒壊によってもたらされる事故のことを言う。

また「爆風雪崩」という表現は、通常の雪崩や氷河雪崩の時に、これらによって埋没するのではなく、これらによって発生する「風」によって、吹き飛ばされる状況を指している。したがって爆風雪崩から逃れるためには、デブリの跡だけを確認するだけでは足りないのである。

山岳の規模が国内に比べてはるかに大きなヒマラヤにおいては、雪崩、氷河雪崩、爆風雪崩は日常的に発生している筈である。我々登山者が目にするのは、その何億分の一に過ぎない。

しかし、これまでに不幸にしてその何億分の一の被害に遭ってしまった隊があり、その貴重な報告もされている。また、HAJで毎年春に開催している「事故と環境対策研修会」の資料集には、例えば「岩と雪34号、35号、43号」に金坂一郎氏が発表された雪崩に関する貴重な論文を掲載している。金坂氏は、これらの中で氷河雪崩について基礎的なことがらを述べられており、大変参考になる。

■氷河雪崩に対する若干の留意点

今回のスキル・ブルム隊の事故は、「氷河雪崩の爆風雪崩に就寝中のBCが襲われた。」特異なケースとなった。これまでに起きた氷河雪崩による日本人の大量死亡は、1979年夏のゴークール・サールと、93年秋のニルカントの各6名であるが、共に昼間の上部キャンプでの行動中の事故であっ

た。

ヒマラヤ、カラコルム等、高峰登山の氷河雪崩に関する資料は確か少ないと言える。しかし、だからと言って手をこまねいていても、事故を防ぐことはできない。これまでに起きた氷河雪崩や爆風雪崩事故の貴重な報告の中から留意点を挙げ、さらに現場での慎重なチェックによって防止できることも多いものと信じる。

以下はキャンプ地やルート決定に際して留意すべき点である。

1. 全体的な地形の把握

まず、候補地の全体的な地形を把握する。この時にスケールを見誤らないことが重要だ。例えば氷河の対岸にキャンプを設けるからといって、「まさかあんな高く遠い所から落ちてはこないだろう」と勝手に判断しないこと。目測ではなく、ロープで氷河の幅・距離を測って確かめてみることも必要だ。ヒマラヤに「まさか」はない。ヒマラヤの自然は、我々の想像をはるかに越えるパワーを秘めている。

また、金坂氏は前述の43号の中で「次に氷が欠

けて落ちてくる前には、まずクレヴァスができる。従ってクレヴァスのでき方についての知識も欠かせない。」と書かれている。93年のニルカントの懸垂氷河崩落前と後の写真を見ると、下から見ると、どう考えても崩落する筈のない巨大な部分が崩落していることが分かる。これなども、上部に大きなクレヴァスが存在していたが、下からの観察では分からなかったかも知れない。

2. 氷塊の確認

ルート上のみならず、目の届く範囲はもとより、必要ならば遠出をしても氷塊の痕跡がないか確認することが重要だ。氷塊は懸垂氷河崩落の生き証人である。金坂氏は前述の43号の中で次のように書かれている。「大きな冰雪崩が出る前に、小さな雪崩が出たという例が何回か報告されているので、小雪崩だといって安心しきってはいけない。ルートに氷塊があるときには、その古さに注意しなければならない。]

今回のスキル・ブルム隊でも、事故の約二週間前の8月5日にも、同じルンゼで氷河雪崩が発生していたことが報じられている。(9月8日付け

東京新聞の本

山の情報誌 岳人



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

97年	第1特集	特別企画
★1月号	日本の雪山大作戦	南米インカ・トレイルを行く
2月号	富士見十三州の山	春のフンザとバルトロ氷河
★3月号	山スキー大滑降	ネパールの夢のトレッキング
4月号	アルプスの雪稜	初夏のロッキーマウンテンコース
★5月号	花と森の山旅	中部の山岳会と奥美濃の山
★6月号	私の花の名山	創刊50年 世界のアルピニストたち
★7月号	今から間に合う海外の山	仙台のクラブ、東北の沢を行く
8月号	みちのくの山と沢	屋久島の緑深い峰々と人
9月号	修験の山は名山	山の達人と訪ねる秋の北海道
★10月号	紅葉の山、尾瀬と南会津	撮影クラブと秋の大峰山脈へ
11月号	晩秋、湯けむり紀行	フリークライミング天国・岡山
12月号	身を守る雪山技術	冬の奥秩父に生きる山人たち

(★は 特大号となります)

東京新聞出版局 (中日新聞) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
東京本社 書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

ヒマラヤの氷河雪崩と爆風雪崩の主なもの

(日本隊1961-1997=38年間 作成：山森欣一) [★=爆風雪崩]

番号	発生年	山 名	高 度	派遣母体名	死亡者数	場所	備 考
01	1960春	ヒマル・チュリ	7,893m	慶応大学	0 1 1	C 1	朝 午前3時氷塊がC 1を襲いポーター 2名死傷。
02	1961春	ランタン・リルン	7,234m	大阪市立大学	4 1 5	C 3	朝 11名が雪崩に襲われ、クレバスで3名死亡。
03	1970春	サガルマータ	8,848m	スキー隊	0 6 6	I F	昼 アイスビルディングが崩壊し死亡。
04	1970春	サガルマータ	8,848m	日本山岳会	0 1 1	I F	朝 アイスビルディングから氷塊が崩落し圧死。
05★	1974春	アンナプルナ S	7,219m	蒲群山の会	0 0 0	B C	夜 南壁の大雪崩で爆風、飛ばされ2名負傷。
06★	1974夏	バインター・ブラック	7,285m	静岡登攀C	0 0 0	C 1	夜 ブロック崩壊。2張り飛ばされ2名負傷。
07	1975春	サガルマータ	8,848m	女子登攀C	0 0 0	C 2	夜 ブロック雪崩のためテント3張りが埋没。
08	1977夏	バツラ I	7,785m	都府山岳会	1 0 0	C 3	昼 9名がブロック雪崩に遭遇1名が死亡した。
09★	1978夏	ジュトマル・サール	7,330m	東京志岳会	3 2 5	C 1	夜 爆風で2張りのテントが飛ばされ死亡した。
10	1978秋	P 29	7,871m	つらぎの会	3 0 3	C 2	昼 千メートル上の懸垂氷河が崩落3名死亡。
11	1978秋	ランタン・リルン	7,234m	大阪市立大学	0 0 0		昼 ブロック雪崩の直撃を受け1名負傷。
12	1979夏	ゴーカー・サール	6,249m	白河山岳会	6 0 6	C 3	昼 アイスフォールの崩壊で6名全員が死亡。
13	1981夏	ガッシャーブルム IV	7,980m	関西 C C	3 0 3	C 2	昼 C 2へ移動中ブロック雪崩に遭遇し3名死亡。
14	1981夏	カンジット・サール	7,760m	千葉工業大学	0 0 0	C 1	昼 懸垂氷河が崩壊1名が埋没するが救助。
15★	1981秋	アンナプルナ I	8,091m	イエティ同人	0 0 0	C 2	昼 テントが爆風で飛ばされ2名が脳震盪。
16	1982春	アンナプルナ III	7,555m	三河合同	1 0 1	C 4	昼 セラックの崩壊が5名を襲い1名が死亡。
17	1983秋	ジヴリン	6,543m	婆沙羅衆	0 0 0	C 3	朝 上部氷河が崩壊し氷塊を胸に受けて失神。
18	1986夏	ウルタル II	7,388m	神渡湖衆	0 0 0	C 1	昼 爆風でテント損壊、2名靴なしで下山。
19★	1987夏	クンヤン・チッシュ	7,852m	サンナビキ	1 0 0	C 2	朝 アイスブロックが崩壊し1名が転落死亡。
20	1987夏	ナンガ・バルバット	8,126m	アウトドアズ	0 0 0		昼 ブロック雪崩のため2名が負傷した。
21★	1987冬	アンナプルナ I	8,091m	群馬山岳連盟	0 0 0	C 1	昼 懸垂氷河が崩落しテント・装備が吹き飛ぶ。
22★	1988秋	アンナプルナ I	8,091m	どんぐり	1 1 2	C 1	昼 懸垂氷河の崩落の爆風に飛ばれ不明。
23	1990夏	チョゴリ	8,611m	横浜市岳協	0 0 0	C 1	朝 シェルバ数名が負傷。
24	1990秋	クラウン	7,295m	H A J	2 0 2	C 1	昼 下山中の2名が懸垂氷河の崩落のため埋没。
25	1993秋	ニルカンタ	6,595m	帯広ビスタリ	6 0 6	C 2	昼 C 2上部の6名が懸垂氷河崩落で行方不明。
26★	1997夏	スキルブルム	7,360m	神奈川 H C	6 0 6	B C	朝 懸垂氷河の崩落の爆風で飛ばされ6名死亡。

朝日新聞にその時の写真が掲載されたが、中込氏の葬儀の折りに展示されていた写真では、中程からの手前の岩稜を越えて、氷河雪崩が二分されているのが確認された。20日の氷河雪崩は、この写真の時よりも大きな崩落であったと考えられるので、手前の岩稜の中程から二分された上の氷塊や風がキャンプ地を襲った可能性が考えられる。）

3. 天候の把握と記録

長時間の好天や悪天が連続した後や、急激な気温の変化（上昇・下降）などは、最大の注意信号である。不安定な状態で維持されている懸垂氷河の崩落や氷塔の倒壊は、バランスが崩れた時に起こる可能性が高い。天候の変化については毎日の話題にするようなシステムを確立すべきである。特に雪崩や氷河雪崩の現象は、ノートに記録して

把握すべきである。

4. 時間帯に関係なく崩落する

懸垂氷河の崩落や氷塔の倒壊に決まった時間帯はない。朝方、夕方が多いなどという先入観を持つべきではない。条件が整えばいつでも崩落し倒壊することは、別表のとおりである。

5. 形に騙されない

懸垂氷河の先端や全体の形が、10年前の写真と同じだから大丈夫だと判断しないこと。崩落を繰り返しながら同じような形に保たれているケースも多い。

6. 爆風への配慮

氷塊やデブリのある位置から判断してキャンプ地を決めると、予想もできない風のためにテントが飛ばされたケースが報告されている。（山森）

15座目の八千メートル峰騒動顛末

9月11日付け朝日新聞朝刊と読売新聞夕刊に、現在有る八千メートル峰14座に次ぐ15座目の山が発見されたと、北京発共同電を報じた。この報道の顛末を報告すると共に、現在の八千メートル峰の状況について考えてみた。

(文責：山森 欣一)

■15座目はブロード・ピーク中央峰であった

11日朝、私は自宅で朝日新聞の記事を見た時に、ルームへ行ったら早速中国登山協会へ登山申請を出そうと漠然と考えた。しかし、電車の中でふとブロード・ピークのことが頭をよぎった。

ルームで中国製と宮森マップの二つを出して、K2の南東8キロを測ると、予想に違わずほぼブロード・ピーク中央峰の位置になった。中国地図には「Zhongyang」と表記されており、日本語では「中央」になる。やっぱりか。早速この旨を朝日新聞運動部宛FAXした。この時点では、読売新聞朝刊に記事はなかったが、読売もまた夕刊で同電を報じた。

この日、遊歩登山学校の福島校長、NHKの東野氏、朝日・大阪の山田新氏から照会の電話があったが、ブロード・ピーク中央峰であることを伝えた。また、山田氏からは折り返しもう少し詳しい

内容が伝えられた。それによれば、経緯度もあり、 $35^{\circ} 49' N$ 、 $76^{\circ} 34' E$ とのことで、コルの標高が7,830mとも知らされた。宮森マップには秒まで出ているが、まさに分まで同経緯度であった。夜になって朝日運動部の石井氏から自宅に連絡があった。翌12日には、読売の迫田氏からも確認の電話が入った。

こうして、朝日は12日の運動面で「新8000メートル峰は登頂された山」、読売は14日の運動面で「ヒマラヤに新峰」つかの間の夢」とブロード・ピーク中央峰であることを報じた。また朝日16日夕刊「窓」欄で山田氏が「幻の八千メートル峰」として15座目にはなりそうもないこと、かつてのアムネマチン騒動などを併せて紹介した。

■八千メートル峰14座とは

このようにして、新八千メートル峰は15座目とならず一件落着いたのである。それでは、そもそも「八千メートル峰14座」とは何か。との疑問が湧いてくる。

例えば、衛星峰的な取扱いを受けながらも、登頂すれば、なんとなく「初登頂」とか「八千メートル登頂者」として公認されている峰を挙げるならば、

- | | |
|-----------------|--------|
| 1. ヤルン・カン | 8,505m |
| 2. カンチェンジュンガ中央峰 | 8,482m |
| 3. カンチェンジュンガ南峰 | 8,476m |
| 4. ローツェ・シャル | 8,400m |
| 5. アンナプルナ中央峰 | 8,060m |
| 6. アンナプルナ東峰 | 8,020m |
| 7. ブロード・ピーク中央峰 | 8,006m |
| 8. シシャ・パンマ中央峰 | 8,008m |

などがある。

私は、もし15座目の認知を受けるとするならば、山容、位置、コルなどから考えて、まずヤルン・カンがその座を占めるのにふさわしいと思う。ブ

1997年(平成9年)9月11日 (朝刊)

1997. 9. 11

北京10日共同

158000
メートル級の山

15番目発見

K2の南東8キロ

付中国各紙は、新疆ウイグル自治区のカシュガル地区でこのほど、標高八、〇一

一、〇一の山が新たに確認され、世界の八千メートル級の山は計十五座となったと報じた。

この山は「中央峰」と名付けられ、高さは十五位。

カラコルム山脈の世界第二の高峰K2(八、六〇一メートル)の南東約八キロにある。一九七六年に行われた航空観測の際に見つかり、最近注目を集めたが、最近になって中国科学院蘭州氷河凍土研究所の専門家が独立峰であると認定した。

専門家は「中国地質学上の大きな発見であると同時に、世界の登山界は新たな目標を見つけたことになる」と述べている。

ロード・ピーク中央峰の順位は数番下がらざるを得ないものと思う。

ちなみに、R.メスナーは、東京新聞出版局発行の「生きた、還った 8000m14座完登」の中で、8000メートル峰14座について、以下のような見解を述べている。

「そのうえ、あのころ、ぼくにはまだわかっていなかったが、8000メートル峰といっても、それはまったく偶然の所産だということである。イギリス人やアメリカ人は、メートル法を使わずフィートで測る。8000メートル峰は26000フィート以上ということになり「27000フィート峰」では、8000メートル峰のような、切りのよい、わかりやすい数字にはならない。8000メートル峰と簡単に片づける数値ではなくなるのだ。もし仮に、ナポレオンがメートル尺をもう少し長く制定していたなら8000メートル峰は14座以下になっていたかもしれない。もう少し短くしていたなら、あるいは9000メートル峰さえ現れたかもしれない。

実際に8000メートル峰はきっちり14あるかどうか、とにかくぼくには、はっきりいえない。いずれにしても、こういったことは地理学者が問題にすることだ。彼らは、8000メートルの峰を14数えあげているのだ。その際、ただ山塊を8000メートル峰として認めたのである。

カンチェンジュンガ、ブロード・ピーク、いや、厳密に考えれば、たいていの8000メートル峰のまだ登られていない一部の隣接峰は、計算の中に入っていない。カンチェンジュンガを遥か遠くから眺めると、この山はひとつのどっしりとした山の塊りにみえるが、隣の峰々はほとんど見分けられない。だから隣の峰は峰として、それぞれ独立した8000メートル峰に数えないのは正しいと思う。同じことはローツェにはあてはまらない。ローツェはそもそも、その名が示すように、エヴェレストの南の峰である。だから、もしかすると独立した8000メートル峰としては地図に載せられないのかもしれない。]

H A J 30周年記念行事資金協力をお願い

H A J は、1967年10月に創立され、緒先輩達の努力により本年、30周年を迎えることになりました。これを機会に記念の幾つかの行事を行うこととなりました。概要は下記のとおりであります。執行部としましては、これらの行事にかかる費用につきまして、極力外部資金の導入などを計って賄う予定であります。会員の皆様にも資金のご協力を仰ぎたくここにお願い申し上げます。

記

1. お願いする金額：一口 1万円

*機関誌「ヒマラヤ」誌上にて氏名・口数を公表します。(匿名を希望される方は、その旨ご連絡下さい。)

2. 記念行事の概要：

1) 式典関係：

式典：1998年1月25日(日)(300名程度を予定)

午前：日本人ヒマラヤニストによるパネ

ルデスカッション

午後：ネパール、インド、パキスタン、中国から登山関係者を招請し、それぞれの国の登山環境の現状と問題点について講演をお願いする。

夜間：記念祝賀会

2) 出版関係：

- 1. H A J 30年間の行動記録： 500部
- 2. ヒマラヤ日本隊のまとめ： 500部
- 3. ヒマラヤ日本隊遭難事故事例集：1000部
- 4. 機関誌「ヒマラヤ」総索引： 200部

3) 野外関係：

それぞれのヒマラヤ諸国で行われる行事にあわせて臨時派遣。

4) 写真展：

会員からヒマラヤの「この一枚」を募集し、展示する。

9-3 カント (康格多・Kangto)

* 山脈：東部ヒマラヤ山群。マクマホン・ライン

* 位置：ラサ (3,658m) の南東約160km。

[27° 54' N, 92° 32' E]

* アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからはヤル・ツァンポー江のツェタンを経由し、ここから南下して5,000m近い峠を二つ越してツォナへ。さらに北東のシャンシャン峠(5,200m)からカタまではジープが使える。ラサから3日間の行程。カタからヤクのキャラバン3日間でカント峰北西のニャンル・チューのBCに到着する。

* ルートの所要日数：88年同志社大学隊は、北西面から北西稜に取りつき、17日目の3月24日に初登頂に成功した。

* 山の概念：主峰7,055m。北に7,037m峰があり、そこから北東、北西、西に三本の尾根が派生している。主峰の南にあるピークからも四方に尾根が張り出しており、全体に重量感のある山容である。北東10.5kmにチウモ峰(6,890m)があり、さらに東にニェギェ・カンサン(7,047m 中国名はトゥイ・カンリ6,990m)がある。

* 通常の登山時期：春と秋

* 山名：カント峰は地元では「シェルカン・カルボ」と呼び、その意味はチベット語で「東の白い雪山」である。

* 小史：なし

* 参考文献：遥かなる久恋の峰 同志社大学
「1989年7月毎日新聞社刊」

登山の概要

■主峰 (7,055m)

1986年

10月～12月 偵察隊 同志社大学隊

翌年の本番のために4名で偵察に入る。11月2日4,800mにBC設営。主に北西面を偵察し、5,600mに達する。

1988年

9月～11月 北西稜 同志社大学隊

3月5日ムタージョ4,700m地点にBC設営。15日北西稜上6,070m地点にC1設営。22日北西稜上6,450m地点にC2設営。24日アタック隊はC2を8時前に出発して、北峰に12時半登頂。14時25分、宮崎、高野が主峰の初登頂に成功した。26日にも岩田、國久とソナムが登頂した。

[隊長：内藤真一(44) 藤井尋臣(40) 角谷弘司(31) 宮崎貴文(34) 間瀬伸一(39) 岩田喬(27) 中川雅幸(24) 高野晃輔(23) 野村俊輔(23) 吉田尚(24) 高須和朗(21) 國久武揚(20) 黒川智子(27)]

[遥か久恋の峰 チベット・カント峰初登頂の記録] 1989年7月毎日新聞社刊



▲成都～ラサ間の機上から見たカント山群。右からカント、チウモ、ニェギェ・カンサン

トレッキング・ピーク 『チュルー』について

野沢 歩

ネパールには、トレッキング・ピークとして手軽な手続きで登れる山が、18座開放されている。その中にはアイランド・ピークやメラ・ピークなどの様に、多くの登山者で賑わっている人気の高い山もあるが、概して他の山は比較的静かな登山が楽しめるといえる。

さてこの18座中、最高標高にあたる山にチュルー東峰(6,584m)がある。最近発売された「岳人No.603号」のクロニクルで、このチュルー東峰の登攀記録が掲載されていた。結論から言えばこの登頂された東峰と呼ばれる山は右ページ図のC峰にあたり、現在、南東峰とよばれている山にあたる。私自身、昨年この山を目指す過程において、チュルー山群が、いまだこのピークを同定するにあたり混乱が続いている様である。果たしてチュルー東峰はどの山にあたるのだろうか。またそのチュルーの混乱の原因についてヒマラヤ誌上を借りて解説したい。

〈チュルー山群〉

チュルー山群はアンナプルナ山群の北面、マルジャンディをはさみ位置する。ダモダール・ヒマラヤの一角にあたる。そのチュルー山群の中には6,000m峰が4座あり、A峰(6,419m)、B峰(6,584m)、C峰(6,400m)、D峰(6,018m)、となっている。

古く'77年発行の学研「世界山岳地図集成ヒマラヤ編」を開いてみると、この山群はチュルーで

はなくグンダンの名称が与えられており、A峰は6,511m、B峰6,584m、C峰6,400m、D峰6,059mと多少標高が違うものの4座が記載されている。A峰はグンダン北西峰、B峰はグンダン主峰6,584m、の名称が付けられている。

この地図で使用されているグンダンの名称は、もともと麓の村グサンに起因しているものと思われる。ちなみにC峰への登山ルートとなる麓にジュルー(Jullu)と呼ばれるカルカの村があるが本来このC峰、D峰をチュルー、そしてA峰、B峰に対しグンダンと呼ぶべきであろうか？

さらにD峰より東に位置する山々に'52年にマナスル偵察の祈り、今西錦司隊によって登られた西チュルー(5,880m)、『55年に西ドイツ隊によって登られた東チュルー(5,880m)の山々がある(今回問題のチュルー東峰、西峰とは異なる)。これら山々の麓にはジャルー(Jyaru)という村があり、これらチュルーの呼称はこの地名に関連しているようだ。

話はそれだが'89年に初登頂されたとして話題になった「チュルー南東峰」と名づけられた山はC峰ではなく、その西チュルーあたりの山らしいことがわかった。(岩雪147号 近藤和美氏著「チュルー南東峰初登頂の怪」に詳しい)

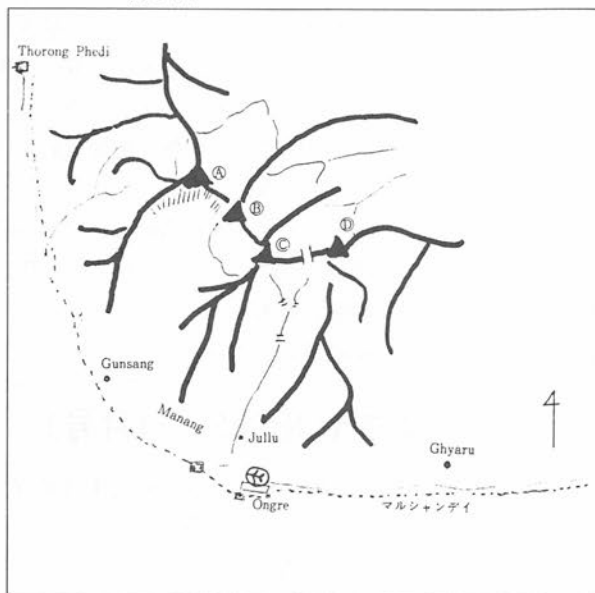
さて当初'78年にネパール山岳協会(NMA)がトレッキング・ピークとして開放するにあたり、チュルーについてはチュルー西峰(6,630m)、チュルー東峰(6,200m)の2座を開放した。標高に関しては多少違うが、チュルー西峰がA峰、チュルー東峰がB峰を指すとおもわれる。

その直後'79年にチュルー西峰を目指した、H A J会員の片岡氏の報告によると(ヒマラヤ107号に掲載)C峰(その当時の東峰)に登頂して、西峰の登頂として報告され、さらにD峰が東峰で



▲B峰、チュルー東峰(6,584m)

▼チュルー概念図



あると同定されている。

また '82年にチュルー西峰をめざした須磨労山＝神戸中央労山はB峰を西峰として目指すが頂上には届かず、西峰のルート手前のA峰に登頂しその峰をグサン・ピーク登頂として発表している。(山と仲間 156号に掲載)

その後NMAは '83年の標高改定によって西峰を6,419m、東峰を6,584mと発表。いわゆる単に改定以前の標高を変えたのではなく、ピークを一つずつずらした形、即ちA峰を西峰、B峰を東峰とした形となった。奇しくも上記の須磨労山＝神戸中央労山の登頂したグサン・ピーク(A峰)は当初の目的であった西峰(名称に関して)に登頂していた事になるのである。

このように、4座のチュルーの6,000m峰の内、2座だけが開放され、さらにこの標高改定により名称がずらされた形になったため、同定に大きな混乱をきたしてしまっただけである。

さらに大きな混乱の要因となったのが、'89年イギリスで刊行された、ネパールのトレッキング・ピークのガイド書「The Treeking Nepal」(Bill O'Connor 著)の発行にあると思われる。

この書は18座全てのトレッキング・ピークのルート・ガイドなどがまとめられてあり、トレッキング・ピークを目指す登山者にとって大変有り難い好著であるといえる。

▼C峰、チュルー南峰(6,400m)



さてこの書の中にあるチュルーの項を開いてみると、チュルー山群にある6,000m峰4座全てが紹介されている。しかしその各ピークの名称が便宜的にか、A峰を西峰、B峰を中央峰、C峰を東峰、D峰を最東峰と命名されて紹介されている。

そのためか、チュルーのような、あまり情報量の少ない山を目指す登山隊は、この書だけをガイド書として登山を行う隊が非常に多いため、こうしてチュルー東峰の許可を取り、C峰をチュルー東峰として登っている登山隊が多い様である。今回の「岳人」に掲載された記事も、このガイド書を元に登山されたみたいだ。

名称とは関係なく、このC峰はピサンからマン盆地に下る途中、マルシャンディをはさみ、ピラミダスな立派な山容で望む事が出来る。たとえC峰が、チュルー東峰でなくても登りがいのある山といえる。しかし、自分達の登る山の正しい名称(ネパール政府発表の名称)を理解した上で登山する必要があると思う。実際カトマンズで販売されている、トレッキング地図も現在、正しく修正されている。

整理してみると、NMAの標高改定に始まり、さらにガイドブックの便宜的に付けられた様な名称のためか、真の(ネパール当局の示す)チュルー山群の同定に混乱が見られていた。現在、正しく示すなら、A峰が西峰(6,419m)、B峰が東峰(6,584m)、C峰が南東峰(6,400m)、D峰(6,058m)となる。今後これらチュルー山群の山を目指す隊の同定の指針になればと思います。

今のところ東峰の許可でB峰、C峰とも登山するにあたり問題はない様に思う。

■ 寸 感 ■

スキル・ブルムから思いがけない訃報が届いた。広島さんも、原田さんもチョゴリザに登ることを夢見ていた。それを壊し、死に追いやったのは、印パの戦争だ。登山にも平和が大切だ。(山森)

事務局日誌(9月)

- 2日(火) ニンチン・カンサ協議(山森、天城)
 4日(木) ポカラ国際山岳博物館協議(於H A J ルーム、山森)
 群馬県山岳連盟カラコルム登山隊祝賀会(於東京プリンスホテル、山森、寺沢、中川)
 9日(火) ヒマラヤ311号発送
 10日(水) ニンチン・カンサ隊病院清算書5名へ発送
 11日(木) 新八千メートル峰の件、朝日新聞社へFAX
 登山の日の件、アルパイン・ガイド協会へFAX

- 13日(土) 中込清次郎葬儀(於上野原、山森、八木原、尾形、寺沢、中川、橋本)
 23日(火) 菊田佳子葬儀(於横浜、山森、八木原、尾形、寺沢、中川、中岡)
 26日(金) ポカラ国際山岳博物館協議(於岸体育館、山森)
 28日(日) スキル・ブルム峰合同お別れ会(於鎌倉、山森、八木原、尾形、中川、中岡、橋本)
 29日(月) 東京集会(20名)

ヒマラヤ No.312 (11月号)

平成9年10月10日印刷 9年11月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004